論文審査結果の要旨

本論文については、博士論文公開審査会（平成 27 年 2 月 27 日、於文学部会議室）において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

①刊行主体・様式など各版本の性格について。
②文章の洗練の実態について。
③劉龍田本を選択した理由について。
④各種簡本の性格について。
⑤葉逢春本・余象斗本の簡略化について。
⑥関索・花関索説話の導入・削除の過程と理由について。
⑦『資治通鑑』利用の有無について。
⑧『三国志演義』成立と建陽（建安）の書坊の関わりについて。
⑨大衆的読書の成立過程に関して考察する上で『三国志演義』成立過程の研究が持つ重要性に　ついて。

本論文は、『三国志演義』諸版本の関係を明確に系統付け、本文異同の状況と依拠している歴史書との関係の両面から、『三国志演義』の成立過程を復元し、これを大衆的読書という行為が誕生し展開する過程のモデルとして提示するものである。

葉逢春本系統のテキストが、嘉靖壬午序本系統のテキストより原型に近いということはこれまでにも一部で論じられていたことではあるが、本論文のように具体的に論証されるのは初めてである。更に画期的なのは、両系統の間にもう一段階、本論文において「簡本系祖本」と呼ぶテキストが存在したことを、精密な校勘作業により、疑問の余地なく立証したことである。この点は全くの創見であり、従来の『三国志演義』研究を根底から覆すものといっても過言ではない。その上で、三系統間の異同のパターンが部位により異なることをデータにより明快に示し、部位により成立時期や成立事情が異なるであろうこと、つまり『三国志演義』は一度に書かれたものではなく、段階的に成立したことを実証的に提示したことは、『三国志演義』成立過程の研究において極めて重要な意義を持つものである。

また、いわゆる「関索説話」について、後から挿入されたものであるという定説を説得力ある根拠を示して否定したこと、『三国志演義』制作に当たって『蜀漢本末』が利用されたことを初めて指摘したことは、いずれも全くの新説であり、今後の『三国志演義』研究に大きな影響を及ぼしていくものと思われる。

更に、原拠となった歴史書との関係を精密に調査した上で、その使用パターンを割り出し、そこから『三国志演義』の執筆プロセスを復元していくという手法は全く斬新なものであり、従来資料がない以上不可能であると考えられてきたこの問題の解明において決定的な重要性を持つものである。得られた結論は、版本間の異同状況と符合しており、『三国志演義』が段階的に成立したことは本論文によって立証されたと

いってよい。また、版本の刊行状況や、建安書院で刊行された『蜀漢本末』が利用されていることなどから、『三国志演義』の成立に建陽（建安）の書坊（出版社）が関わっていた可能性を提示したことは、『三国志演義』成立事情を解明する上で重要な意義を持つものである。

以上の諸点に加えて、特筆すべきはその研究姿勢である。筆者は、『三国志演義』の成立と展開の過程を通して、大衆の読書という今日一般に見られる現象がどのようにして発生し、発達してきたかを検証することを研究の最終的な目的とする。これは、筆者が今日にまでつながる広い問題意識のもとに研究を行っていることを示しており、確かに、本研究の内容は、大衆的読書の初期段階に関する重要なサンプルと認めうるものである。

以上のように、本論文は、深い問題意識のもとに、膨大な文献に対して精密な調査を行い、斬新な手法により、極めて実証的に研究を進めて、研究史上に新たな地平を切り開いたものであって、ここで示された成果は、従来の『三国志演義』研究を全面的に塗り替えるものといってよい。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。